

北海道浮魚ニュース

令和 5 (2023) 年度 13 号

2023 年 8 月 31 日

道総研 釧路水産試験場

【URL】 http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/kushiro/section/zoushoku/ukiuo_news.html

◎道東太平洋イカ類南下期資源調査結果

・調査海域のスルメイカ分布密度は低い水準にあったと考えられる

- ・調査期間：2023 年 8 月 18 ～ 23 日
- ・調査海域：道東太平洋沿岸
- ・調査船：北辰丸（255 トン、イカ釣機 5 台装備）
- ・調査方法：イカ釣機による 1 晩 2 地点の夜間釣獲調査、CTD による海洋観測

1. 水温環境及び流向流速

図 1 に 2023 年及び 2022 年の調査海域における水温と漁獲調査結果を示しました。2022 年の調査は調査船の機関に問題が発生したため広尾沖 St.2、落石沖 St.9、根室沖 St.10 の 3 点のみの実施となっています。

2023 年の 10 調査点の表面水温は 19.6 ～ 22.8 °C の範囲にあり、スルメイカが耐えられる高水温の上限とされる 21 ～ 22 °C 前後の点が多くみられました。50 m 深の水温は 5.2 ～ 13.9 °C の範囲にあり、北上期のスルメイカ来遊の目安とされる水深 50 m で 10 °C 以上の点は大樹沖 St.3 から昆布森沖 St.6 の海域に限られました。全体として表面と 50 m 深の水温差が大きく、スルメイカにとって適水温となる水深の範囲が狭い状態にありました。

今回の調査で ADCP（超音波流速計）により得られたデータのうち、広域的な水塊構造の目安となる 100 m 深の流向流速を図 2 に示しました。根室沖から厚岸沖にかけて沿岸を東から西に向かう弱い流れがみられた一方、襟裳岬東側から釧路沖にかけては南西から北東に向かう流れがみられ、釧路沖周辺に二つの流れの境界が存在する様子がうかがえました。

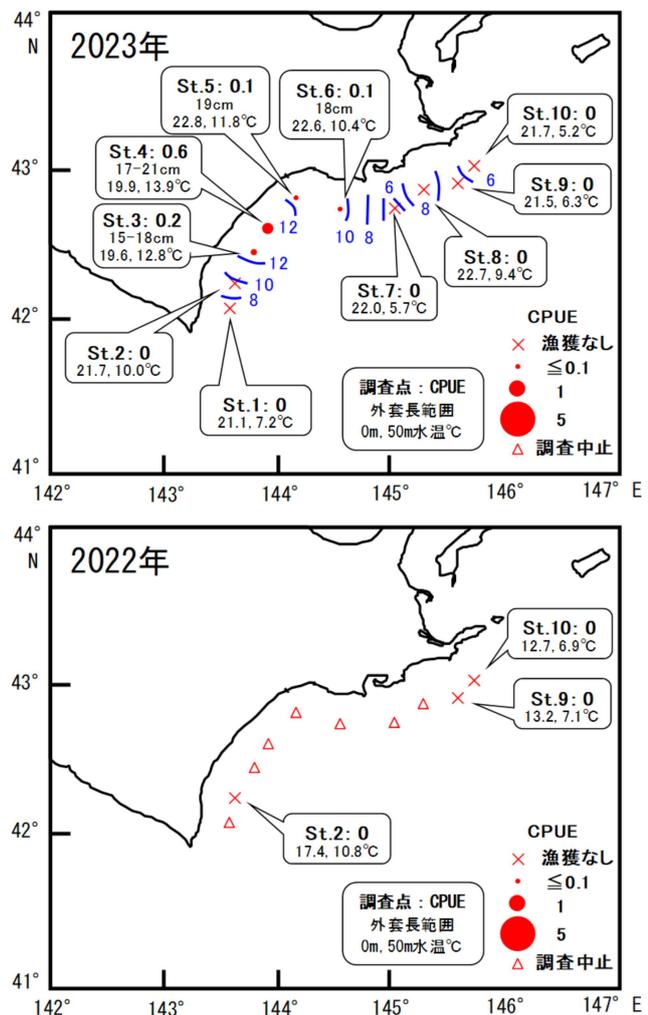


図 1 2023 年（上）と 2022 年（下）の漁獲調査結果と水温。●は漁獲調査点を示し大きさは CPUE（イカ釣機 1 台 1 時間当たりの漁獲尾数）を表す。等温線は 50 m 深の水温分布

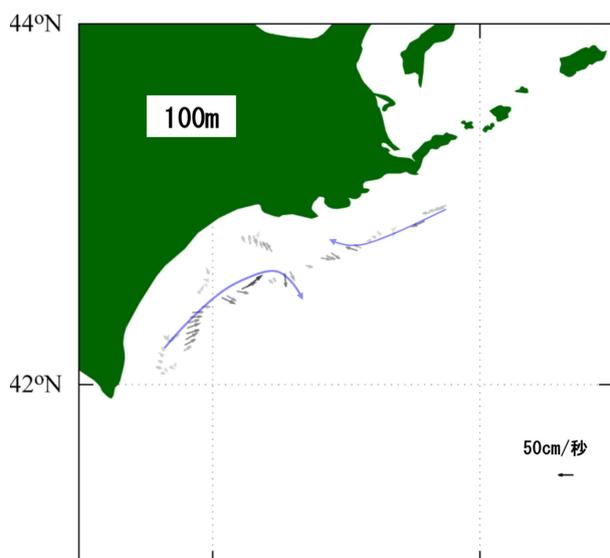


図2 ADCP観測により得られた100m深の流向流速。青い透明矢印は模式的に表した全体的な流れの概略

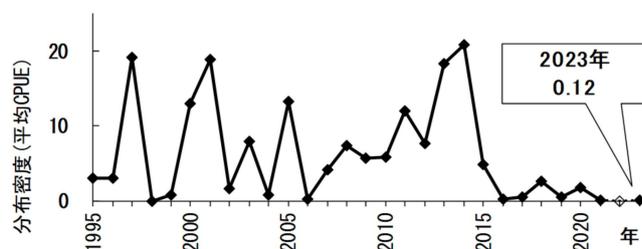


図3 8月道東太平洋調査におけるスルメイカ平均CPUEの経年変化(2022年は参考値)

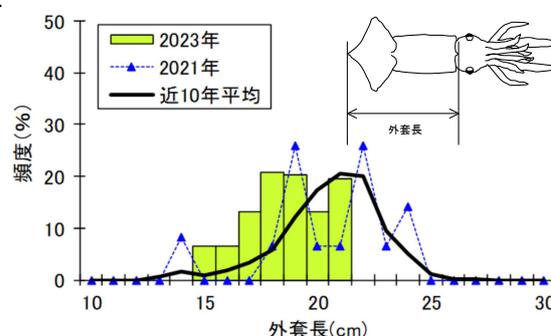


図4 8月道東太平洋調査におけるスルメイカの外套長組成。「近10年平均」は2012～2021年の平均値

2. スルメイカの分布

漁獲調査を実施した10調査点のうち大樹沖 St.3 から昆布森沖 St.6 にかけての4点で合計15尾の漁獲がみられました(図1)。この4点は海洋観測で50m深の水温が10℃を超えた点と一致します。各調査点のCPUE(イカ釣機1台1時間あたり漁獲尾数)の平均は0.12で、参考値である2022年を除き、2021年(0.09)に次ぐ過去2番目に低い値となり(図3)、調査海域におけるスルメイカの分布密度は低い水準であったと考えられます。

3. スルメイカの大きさ

全漁獲調査点のスルメイカの外套長(胴長)は15～21cm(2021年14～24cm)の範囲にありました(図1、図4)。海域全体の外套長のモード(最も多く漁獲されたイカの大きさ)は18cm(2021年19、22cm)にみられ、全体的な魚体サイズは参考値である2022年を除く近10年(2012～2021年)の平均に比べ小型でした(図4)。

4. アカイカ

本調査でのアカイカの漁獲は4年連続でみられませんでした。